

コリント人への手紙第一 1章 「キリストにある知恵と力」

1A 挨拶にあるキリストの中心性 1-9

1B 神の教会 1-3

2B 神の恵み 4-9

2A 人につくコリントの人々 10-17

1B 教会における派閥 10-12

2B 人の名によるバプテスマ 13-17

3A 神の知恵なるキリスト 18-30

1B 十字架のことば 18-25

1C 世の知者を愚かにする神 18-21

2C つまづくユダヤ人、愚かとするギリシア人 22-25

2B 神の召し 26-31

1C 愚かな者、弱い者を選ばれた方 26-29

2C 主への誇り 30-31

本文

コリント人への手紙第一をこれから見ていきます。使徒の働き(18章)のことを思い出していただきたいのですが、パウロが第二次宣教旅行でたどり着いたのがコリントでした。マケドニア人の、助けてくださいと求める夢を見て、トロアスから旅立ち、アジアからヨーロッパへの宣教が行われました。ピリピ、テサロニケ、ベレアに行き、それから船に乗って、アテネにいました。そしてコリントに移ります。そこで、最近、ローマから動いてきたアキラとプリスキラに会い、同じ天幕作りだったので、彼らの家において仕事をしながら、会堂では福音を論じました。そこでユダヤ人たちが口汚く罵るので、彼は場所を移し、会堂の隣にあった、神を敬う人の家に住み語り続けました。主が夜に現れて、「語り続けなさい。」と言われたので、彼は一年六か月の間腰を据えて、神のことばを教え続けました。コリントの教会は、このようにして建て上げられました。パウロが宣教の旅で長期に滞在したのは、エペソの他にはこのコリントです。

そして、パウロはそこからエペソにも行きましたが、わずかに滞在した後で、エルサレムに行き、それからアンティオキアに戻りました。そして第三次の宣教旅行に向かいます。その時に、エペソにおいて大いなる神の働きが行われました。そこに3年近く滞在しています。その終わりの頃、紀元55年頃に、コリントから指導的な役目を担っている教会の人々が、いろいろな問題が起こっているということを伝えにパウロのところへやってきたのです。実は、この手紙の前にも、少なくとも一度、手紙を送っていますが、それに対する彼らの反応についても、この第一の手紙でパウロが書いています。コリントもエペソも、非常に繁栄した貿易の都市だったので、船舶も頻りに往来し、手紙の行き来も容易にできたのでしょう。

コリントは、パウロが腰を据えて教えてきた、まるで彼らが自分の信仰の子たちのように見える教会だったでしょう。けれども、それは彼らが健全に霊的に育っていたとは限りません。むしろ、多くの問題を抱えていて、パウロ自身にさえ批判の矛先を向けていたのです。親子の関係で、親が愛しているのに、その愛が分からずに反抗する子どもの関係に似ているかもしれません。第一の手紙では、具体的な問題をパウロが一つ一つ取り上げて、それを福音の真理に照らして正していきます。第二の手紙では、パウロは彼らに対する愛を、個人的な感情も込めて語っています。

コリントの教会の人たちの問題は、ひとえに霊的に成長していないことです。生まれながらの性質は、信仰をもって御霊によって新たに生まれても残っています。それを肉と言いますね。パウロは 3 章で、彼らを「肉に属している」「キリストにある幼子」と言っています。彼らは、神の恵みによって、信仰によって救われました。それから、罪に対して死んでいるとみなし、自分たちの手足を義のために献げるという生活が必要ですね。聖なる者とされたのですが、聖なる歩みをしなければいけないのに、それがありませんでした。

具体的にパウロが取り上げている問題をこれから読んでいきます。初めに、霊的指導者につく派閥、党派の問題。次に、淫乱の問題。次に、偶像礼拝の問題。そして教会の礼拝の秩序の乱れ。最後に、復活の否定という問題です。それらの問題を見ますと、コリントの社会にある問題が反映されています。コリントの文化と社会がそうなので、信じていると言えども、その影響から脱皮できていないのです。ですので、コリント社会の文化的な背景も知っていく必要があります。

地図のある方はぜひ開いていただきたいのですが、コリントは、アテネから西に 90 キロメートルのところにあります。ギリシアは、南が大きな島のように見えますが、実はわずかにつながっていて、島ではなく、ペロポネソス半島という半島になっています。そのわずかにつながっている細長い土地を地峡と言います。その地峡にあるのがコリントです。東はエーゲ海、西はアドリア海になっていて、ローマ時代のコリントは、どちら側にも港を持っていました。

コリントは、ギリシアの町でしたがローマが征服し、そこをローマの植民都市にしました。ギリシアの南部はアカイア地方と言いますが、アカイア地方の首都となりました。アテネは文化都市でしたが、コリントは、東西の貿易で著しく繁栄しました。今でこそ、その地峡には運河がありますが、当時、それを造ろうとしましたが、技術的にまだ困難でした。それでペロポネソス半島の周りを航行しなければいけませんが、約 400 キロメートルもあり、冬は海が荒れるため航行は不可能です。それで、幅が 6 キロメートルしかない地峡なので、むしろ陸揚げして台車や小船で運搬するようになりました。この荷物の移動には時間がかかるので、水夫たちはコリントの町で過ごし、そこでお金を落とすことになりました。水夫たちは、こういう時に何をするかは想像できるかと思います。贅沢で、不道德な町になりました。

コリントの町には、山があつて自然の要害になっています。それをアクロポリスと呼びますが、コ

リントのアクロポリスは、アクロコリントと呼ばれます。その上には数限りない、ギリシアの神々の宮がありました。その跡は今も残っています。そこには、千人もの女祭司がいたとされます。神殿娼婦です。神々への儀式と称して、売春をし、そのお金を神殿につきこんでいました。パウロの時代には、その習慣は廃れていたようなのですが、淫乱の習慣はまかり通っていました。当時、「コリント人として生きる」という言い方は、酩酊と不道德というのと同じ意味だったのです。

それから、コリントはアテネに近いこともあり、ギリシアの文化や考え方が強くありました。ソフィストという人たちがいました。知者と訳したらよいでしょうか。知的な議論や知識をもっているエリートでした。彼らが町に入って来て、自己推薦をします。その町をほめて、その町のことについていろいろ評価します。その弁舌が良ければその町に受け入れられ、活躍します。彼は、弁舌が巧みであっただけでなく、容姿から声音に至るまで演技するようなものだったようです。論者だけでなく、俳優のような存在だったのでしょう。そして、ソフィストには弟子がつきます。そしてソフィストを持ち上げるために、弟子たちは必死になって擁護します。当然ながら派閥のようなものができ、仲間意識ができ、対抗意識も出ます。

今、話しました背景が、そのままコリントの教会の人々にも反映されていたのです。パウロは、初めに、教会の中で党派が出来ている問題を指摘しますが、このソフィストの子弟制度の影響が色濃くあります。コリントの町と大都市である東京にも、同じようなものがあります。豊かにされた町、いろいろなことができる自由のある町です。私たちにも、直接、関わって来る問題が多いです。

1A 挨拶にあるキリストの中心性 1-9

1B 神の教会 1-3

¹神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、

パウロは、手紙の書き手を明らかにしています。自分のことを、「神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召された」と言って、自分は使徒であることをはっきりと言っています。なぜなら、コリントの教会の中に、一部の者たちがパウロは真正な使徒ではないとか、批判をする者たちがいたからです。外部の者たちが入って来て、パウロをこげにして、自分の言っていることを信じさせ、自分の仲間、自分の弟子にしようとしている者たちがいたのです。コリントの教会は、そのために混乱し、パウロとあれだけの長い付き合いがあり、自分たちが養われたのに、それでも疑っていったという背景があります。

パウロは、この手紙をエペソから書いていますが、同伴者に「兄弟ソステネ」がいます。使徒の働きを見ますと、コリントにて、ユダヤ人たちがパウロに反抗して立ち上がり、法廷に引いて行って、彼を訴えたのですが、ローマの地方総督ガイオは、律法に関することは自分たちで解決するがいい、私は関わりたくないと言いました。そして法廷から追い出したのですが、その後で、「皆は会堂司ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。」とあります(18:17)。彼がパウロを訴えたけれど

も、法廷で相手にされなかったので、お前なにやっているんだ！ということで打ちたたかれたのでしよう。つまり、ソステネはパウロの敵だったのです。そのソステネが今や、パウロに同行している兄弟となっています。ここで、「兄弟」とだけパウロが言っているのは、コリントの人たちはソステネのことを良く知っていて、自己紹介も全く必要ないぐらいのものだったのでしょうか。彼らがパウロを批判していることが、どれだけ根も葉もない、無意味なことだったのかが分かるように、ソステネの名前も入れているのだと思います。

² コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。³ 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

コリントの教会を「神の教会」と言っています。ここがまず、大前提です。自分たちの教会のようにして、人々がだれかにつく、反対するということが起こっているからです。そして、パウロは、「主イエス・キリストの名」と「キリスト・イエスにあって」と言って、イエス・キリストを強調しています。神の教会であり、イエス・キリストの教会です。この方が中心になっているはずですが、そして、「すべての人」も強調していますね。なぜなら、神とキリストにあって、私たちは一つになっているからです。どこかだけが何か特別なのだ、他の教会は、このグループはとかいって批判している時に、キリストにあってのみ、私たちが一つになっているのだという真理を忘れているのです。

そして、「聖なる者とされ、聖徒として召された」と言っています。コリントの人たちは、信仰によってそのような立場に恵みによって置かれたのですが、この世のものがまだまだ生活の中にあつたので、これから福音の真理によって正されなければいけないことを教えていきます。

2B 神の恵み 4-9

⁴ 私は、キリスト・イエスにあってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも私の神に感謝しています。

パウロはこれから、コリントの人々について神に感謝していることを話していきます。これらがすべて、「神の恵み」のゆえであることを言っています。すべてのことが、キリスト・イエスにあって神の恵みによるもので、彼らはすでにそうなっています。そして、私たちもそうなっています。

⁵ あなたがたはすべての点で、あらゆることばとあらゆる知識において、キリストにあって豊かな者とされました。⁶ キリストについての証しが、あなたがたの中で確かなものとなったからです。

キリストにあっては、ことばにおいても知識においても豊かな者とされています。キリストにあって、そうなのです。だからコリントの人たちは、周囲の人々が知識であるとか、ことばの雄弁さであると

かを求めています、自分たちはもう豊かにされているのです。そして、コリントの人たちは、御霊を受けて、キリストについての証しが確かなものとなっていました。

⁷ その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けることがなく、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待ち望むようになっています。⁸ 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところがない者としてくださいます。

コリントの教会には、多くの御霊の賜物が与えられていました。12章から14章を見るとそれがよく分ります。それを秩序をもって用いていなかったことが問題でした。それから、主イエス・キリストの現れを熱心に待ち望むようにもなったとパウロは言っています。私たちも求めていきたいですね。ところが、死者の復活はないという教えが入って来ていて混乱していました。一方で再臨を信じているのに、再臨の時に起こる死者の復活を信じていないのは矛盾していますが、そのような矛盾に気づいていなかったのです。

それから、その日が来るまで、主が堅く守ってくださって、責められることのない者としてくださるという保障も与えられています。私たちは、自分たちでしっかり信仰の上に立っていなければいけません、神の真実が私たちを責められるところのない者としてくださるのです。

⁹ 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。

私たちが神を選んだのではなく、選ばれた、召されたというところは大事です。私たちは、自分がどうして救われたのか？もちろん自分たちは信じることをしたのですが、それだけでは決して語れないものがあります。それは、神が選び、召されたからです。だから、神は私たちを完全に救うことができになります。

そしてその目的が、「神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられた」といっています。この方の内にいること、この方と交わること、これこそが目的です。以上が神の救いのご計画の骨格であって、コリントの人たちも神の恵みによって、この交わりの中に入っています。ところが、問題はその恵みの中に生きていなかったということです。

2A 人につくコリントの人々 10-17

1B 教会における派閥 10-12

¹⁰ さて、兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたにお願いします。どうか皆が語ることを一つにして、仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください。¹¹ 私の兄弟たち。実は、あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の者から知らされました。¹² あなたがたはそれぞれ、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言っているとのこと

です。

パウロは、彼らのことを「兄弟たち」と呼んでいます。神の教会にいて、それぞれが神に生まれた者たちで兄弟であります。すべての人がイエス・キリストを主とする人々です。ですから、キリストにあって一つであります。「主イエス・キリストの名によって」と言って強調していますね。この方にあって私たちは一つであり、同じ心、同じ思いになっているのです。

ところが、クロエの家の人たちがコリントからエペソに来ていて、今起こっていることを伝えました。派閥が出来ていたのです、パウロ派、アポロ派、ケファ、つまりペテロ派、そしてキリスト派です。先ほど話したように、人々が自分の属している教師がいるとして、その間で競争をしています。こうしたこと、現実によく起こります。「この牧師の説教は、なんかかったるい。やっぱり、この牧師先生でないとね。」とか、品比べをしているのです。語られている内容ではなく、語っている口調で比べています。そして、ちょっとした考え方の違いで、その人たちは間違っているとして、「教会と言っていても、偽物。私はこれこれの神学を信じている教会にいて、ようやく救いの意味が分かりました。」とか言っています。牧師たち本人は、きょとんとする話です。だって、自分たちはイエス・キリストのしもべで、すべてはキリストのものであり、自分たちはこの方のしもべにしかすぎないからです。パウロもアポロもペテロも、みなお互いに同じ心、同じ思いであり、何ら対立していません。勝手に、コリントの人たちが自分がどの教師につくか決めていたのです。

パウロの他に、アポロがいます。アポロを思い出せますか、初めエペソにいましたが、その時に主の道について教えていました。けれども、バプテスマのヨハネのことまでしか知りませんでした。それでプリスキラとアクラが、もっと正確に神の道を説明しました。すると、彼は力強く、聖書によってイエスがキリストであることを証明しました。その後でコリントに行きました。ですから、パウロがコリントでは初めに教会を建て、アポロが後に来てその続きの働きをしました。エペソでは逆で、アポロが初めに語っていて、教会の素地が敷き始められて、パウロがやって来て教会ができあがりました。アポロは、その語りがとても雄弁であり、説得力がありました。コリント第二に出てきますが、パウロは、手紙での文面は強いが、話すすと弱々しいという批評を受けていたのです。ですから、パウロもアポロも同じ福音を語っていたのに、そこに焦点が行かずに、表面的なところを比較して対立していたのです。

そしてケファまたはペテロは、エルサレムで教会の指導者でした。ですから、ケファに付く人々は、元祖エルサレムの教会こそが正統なのだとしたのでしょう。そのペテロが、エルサレムの会議で、パウロの宣べ伝える、恵みによる福音を擁護したのを知らないのでしょう。

そしてキリストに付くと言っている人たちは、最も問題かもしれません。自分たちだけがキリストにつくと言っていて、他の人たちはキリストについていないとしているからです。意外にこうした人々が今の信者たちにもいます。「教会はすべてだめ、私はイエスにつく。」として、イエスに付くと

言った人々が集まりますが、自分たちが最も分派的になっていることに気づいていません。

2B 人の名によるバプテスマ 13-17

¹³ キリストが分割されたのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか。

パウロは自分に付くと言っている人々を例にとって話しています。他の指導者につくと言っている人々も、もちろん同じように問題があります。キリストを分割していて、それぞれの指導者が十字架につけられ、それぞれの指導者の名によってバプテスマをさずけている、ということになってしまいます。イエス・キリストの名によるバプテスマ、それから、キリストが十字架につけられ、この方の裂かれたからだにあずかることによって、私たちは神の教会に属し、互いに兄弟であることを証しているのです。

¹⁴ 私は神に感謝しています。私はクリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを授けませんでした。¹⁵ ですから、あなたがたが私の名によってバプテスマを受けたとは、だれも言えないのです。¹⁶ もっとも、ステファナの家の人たちにもバプテスマを授けましたが、そのほかにはだれにも授けた覚えはありません。

バプテスマは、自分が誰の弟子になるかを示すのに格好の儀式になっていたのでしょう。「だれだれ先生からバプテスマを受けた。」と言って、それを自分の居場所にしてしまっています。けれども、イエスの名によるバプテスマですね。それよりも、パウロは、こんな問題が起こる前から、たまたま自分がバプテスマを授けていることはかなり少なかったのです。クリスポとガイオ、そしてステファナの家の人たちは、初めの宣教の働きで信じて救われた人々たちです。クリスポは、使徒の働きに出てきて、会堂司でその家族が共に主を信じた、とあります。ガイオは、ローマ人への手紙 16 章で、パウロと共にコリントにいる人々の名の中に出できます。ステファナの家族は、この手紙の 16 章で、アカイアの初穂であることをパウロは述べています(15 節)。おそらく、彼はその人々にはバプテスマを授けていましたが、テモテやシラスがコリントに着いてからは、彼らや他の弟子たちにバプテスマを任せたのではないか、と思われれます。

それだけ、バプテスマはその授けている人が大事なのではなく、イエスの御名によって受けているということが重要であることがここから分かります。

¹⁷ キリストが私を遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を、ことばの知恵によらずに宣べ伝えるためでした。これはキリストの十字架が空しくならないようにするためです。

パウロは、コリントの人たちが派閥をつくっていることの根っこにある問題に集中します。それは、福音、しかもことばの知恵によらない、必ずしも雄弁ではなく、ただ福音のことばを伝えていたこと

です。福音にある、キリストの十字架に話を戻すのです。分裂や分派を造るのは、妥協や譲歩ができない、許容力がないということではなく、教会においては、ひたすらキリストにつながっていないこと。しかも、十字架につけられたキリストを自分のものとしていないことに付きます。

けれども、コリントの人たちにとっては、これは聞き古した言葉かもしれません。けれども、そこにこそ神の力があり、知恵があるのです。そして、十字架のことばによって、神の知恵が、愚かだと思っているところに現れて、人々が賢いとしているものがいかに愚かであることを示しているのだ、ということこれから語ります。

3A 神の知恵なるキリスト 18-30

1B 十字架のことば 18-25

1C 世の知者を愚かにする神 18-21

¹⁸ 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。¹⁹「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」と書いてあるからです。

キリストが私たちの罪のために死なれ、墓に葬られ、私たちが義と認めるためによみがえってくださったというのが、福音です。その十字架のことばを信じる者たちにとっては、罪からの救いをもたらす神の力なのです。力ですから、だれもそれを反論することができません。ペテロが、サンヘドリンで、「この方以外には、だれによっても救いはありません。」と宣言した後で、イエスの名によって癒された人が二人と一緒にいるのですから、返すことばもなかった、とあります(使徒 4:14)。このように、反論できないのです。それは力の現れだからです。それが十字架のことばの力です。

しかし、滅びる者たちにとっては、午前礼拝でお話したように、愚かであります。しかし、それは神が敢えてそうされたというのです。世にある知恵が、神に背いているという罪の問題を取り扱うことなしに、世にある問題を解決しようとしています。その知恵は知恵ではないことを示すために、十字架のことばによって、人々が救われていくようにされていったのです。パウロは、この言葉を、預言者イザヤのことばによって論じています。アッシリアの脅威に対して、主に立ち返らないで、エジプトに助けを求めているのが知恵だとしていたのですが、その知恵を滅ぼし、悟りのある者の悟りを消し去る、と言われました。結局、ヒゼキヤが主の前にひれ伏して、憐れみを願ったその祈りを主が聞かれて、救われたのです。

²⁰ 知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。

ここに挙げている初めの人、「知恵ある者」とは、哲学者みたいな人です。世界の物事を体系立てて理論にして、すべてのことについて答えることのできる人です。「学者」は、律法学者、律法の専門家のことでしょう。後で、ユダヤ人がつまずいたことを話します。そして、「この世の論客」とは、

演説を雄弁にする人々のことです。先ほど話したソフィストのような人々です。彼らが、では救いを与えたのか？という、だれも与えませんでした。十字架のことばという愚かだと見ていることによって、むしろ、彼らの知恵がいかに愚かなものであるかを明らかにしています。

²¹ 神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。

この世の知恵は、午前礼拝で話しましたように、罪の根本である、高ぶりから始まっています。つまり、人は神のかたちに造られ、神に頼り、神と交わることによって初めて知恵と知識が与えられるのに、その神から離れて自分が知者となろうとしているところに間違いがあります。的外れ、つまり罪です。したがって、神は敢えて、宣教のことばの愚かさを通して、自分の悟りで知るのではなく、宣教のことば、神のことばを信じることによって、それで救われるようにされたのです。

パウロは、福音を恥としないとローマ人への手紙で言いましたね。福音は、世にとっては愚かに見えるので、その圧力にまけて恥としてしまうからです。それで、自分で賢くなろうとして、いろいろな知識をふりかけようとしています。けれども、結局、うまくいかないのです。本質は、世は福音を愚かだとみなすからです。けれども、きちんと大胆に伝える。人が、自分の悟りに頼らず、子供が親を信頼するように、幼子のように信頼することによってのみ、その関係を持つことを第一とすることによって初めて、救われるようにされています。

2C つまずくユダヤ人、愚かとするギリシア人 22-25

²² ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。²³ しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、²⁴ ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。

ローマ人への手紙で、「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力」とありました(1:16)。ユダヤ人とギリシア人には、文化にも考え方にも大きな違いがあります。それぞれが求めているものが違います。午前礼拝でお話ししましたように、ユダヤ人は、メシアに対してしるしを要求しました。ギリシア人は、すべてのことを知る知恵を追及しました。けれども、どちらにおいても問題があります。自分の心にある罪です。自己中心性です。ユダヤ人は自分の益になるように、メシアが力を現すことを求め、ギリシア人は自分がすべてを知るために、知恵を追及しました。しかし、自分というものには取り組まないのです。ですから、ユダヤ人は、メシアがローマの十字架につけられるというのは、あまりにも屈辱的なことであり、つまずきとなります。ギリシア人には、不条理の中に自分の身を置く救い主など、愚かでしかありません。大きな文化や価値観の違いはあるのですが、どちらにも同じ罪の問題があったのです。

けれども、「召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」とあるのです。神が憐れみをもって一方的に選び、救われるように召された者たちがいます。それは、自分がどうにかできるものではなく、まったくもって恵みによることです。その者たちは、どうしてそうなったのか分からないのですが、神の救いの力を知ります。キリストの十字架で流された血が、罪を洗い清め、取り除く力があることを知ります。そして、この方にこそ、すべての世にある疑問、不条理に対する答えがあることを知ります。理屈を超えて知ります。神の知恵なのです。キリストにこそ、これがあり、ゆえに、パウロは、「私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられた。」と言ったのです(1:9)。

²⁵ 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

本当にこれはすごい言葉です。神はあまりにも知恵に満ち溢れた方です。この天地の創造物を見るに、どんな知恵があるか知れませんが、人がいかに知恵あると言えども、全く次元の違うことです。しかし人は知恵によって誇り高ぶるのです。だから、神は敢えて、人にとって愚かなことを通して、彼らが知ることのできなかつたことを成し遂げられました。それゆえ、神の愚かさは人よりも賢いのです。同じように、十字架に付けられたイエス様は、あまりにも無力に見えます。しかし、神は敢えてキリストが十字架に付けられるように定められていたのです。そのことによって、どんな権力者であっても征服することのできない、神の御国が、キリストの十字架にある愛を受け入れた、へりくだった者たちの間で広がっていくのです。この世の権力者が、キリスト者の献身と教会の広がりにはだれも打ち勝つことができませんでした。神の弱さは、人よりも強いのです。

2B 神の召し 26-31

1C 愚かな者、弱い者を選ばれた方 26-29

²⁶ 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。²⁷ しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。²⁸ 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。

いや～、これは強烈な言葉です。自分たちがどのようにしてイエス様を信じて、救われたかをよく考えて見なさいと言っています。コリントの人々は、上昇気質があると午前礼拝でお話しました。影響力のある人々に取り入るために、自己実現にいそむ傾向がありました。だから、自分たちが元々、平凡な人間で、知者とか身分の高い人々は少ないのに、それなのに、いつの間にか自分たちがそのような者になったかのような錯覚に陥ったのです。この世の考えを教会に取り入れて、霊的に賢くなった集団だと思い込んでいました。

教会が、この世の後追いをすると悲惨です。教会があまりにも見劣りがする、世の中のことを知

らないだとして、この世にあるものと歩調を合わせていきます。すると、世はずっと先に進んでいまずから、世においてもあまりにも遅れている知識や情報になっているのです。色あせているように見える福音こそが、実は世において人々が求めている飢え渴きを満たす、新しい泉となっているのに、それを信じている自分たちが古臭いとみなして、周りの人々と同じようになろうとするのです。しかし、世に追従する教会ほど魅力を失うものはありません。味気のない塩になってしまいます。

神のなさることは、恵みです。ご自分がいかに恵み深いか、その恵みの栄光を現すために、取るに足りない者、見下されている者、無に等しい者を選ばれました。教会というのは不思議なところ。一人ひとりのクリスチャンというのは、不思議な人たちです。なぜなら、人間的に考えたら、「なに、この人？」と思われるような、無力さ、愚かさ、見下されるような要素があるのです。けれども、「でも、すごいんじゃない、この人？」と思わせるような、なんでこんな人がこんな大きなことができているの？というのがあるのです。何も無いのに、多くのものを持っている人よりも多くのことを成し遂げている、みたいなのところがあるのです。

人間的に優れていることがあるように見える人たちも、イエス様に用いられる時は、そのような取るに足りない、愚か、無力というところにキリストに触れられて、それで生きているから、その人たちも用いられています。パウロがまさにそうです。彼はユダヤ教のサラブレッドです。エリートです。ギリシアの哲学や文学にも、タルソの町出身ですから熟知していたことでしょう。ローマ市民でもありますし。けれども、彼の罪は、キリストの弟子たちを迫害したところに露わにされました。彼がいかに罪深く、愚かで、取るに足りないか、明らかにされたのです。そのところで、イエス様が会ってくださいました。だからパウロは、これらの有利に働くと思われることをすべて、「塵あくた」としたのです。

ですから、どうしようもない人々が集まっているのが教会なのです！自尊心や自画像で悩んでいる人がいれば、吹っ切れてください。自分はヤバい人、とんでもない人だと分かれば、すっきりします。けれども、そのヤバい人、とんでもない人をなぜかこよなく愛されて、気が狂ったかのようにご自分の独り子を死に渡すほどのことをやり遂げたのが、私たちの神です。

²⁹ 肉なる者がだれも神の御前で誇る事が無いようにするためです。

どうしようもない人が、ものすごいことをしている、この矛盾を埋めるのが神です。この人がこんなことできるはずがない、ということは、神がこの人を用いられているということか？神はすごい！となるのです。これが神のご自分の栄光の現し方なのです。肉をだれも誇ることができなくなるように、神はされています。

2C 主への誇り 30-31

³⁰ しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神

からの知恵、すなわち、義と聖と贖いになりました。

そうです、自分の肉には何もよいものがありません。何が取りえなのかと言ったら、「神によってキリスト・イエスのうちにあります」ということなのです。だからキリスト中心であるのが教会です。教会が、その他のことを中心にしたりしたら、瞬く間に力を失います。知恵を失います。この方にこそ知恵があるからです。

その知恵の内容は、「義と聖と贖い」であります。義とは、ローマ人への手紙で学びました、神の正しさであり、その正しさが信仰によって賜物として与えられました。聖とは、罪から離れていること、汚れから離れていること、被造物や周囲のものから離れていることです。この方が聖であるから、キリストにあつて私たちが聖徒となったのです。そして、贖いは、買い戻すことです。この世界が、悪魔に売り渡されてしまいましたが、キリストが代価を支払われて、奪還されました。再び戻って来られる時に、その所有権を行使されます。贖われるのです。

だから教会は、どんなことが世に起ころうとも、キリストを宣べ伝えるのです！社会で起きていること、政治で起きていること、巷ではやっていること、そんなものではなく、キリストがすべてのすべてであり、キリストこそが道であり、真理であり、命であり、この方がすべてのものを満たす方なのです。

³¹「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

これは、ユダ王国が罪の中に入っている時に、エレミヤが預言した時のことばの一部です。「9:23-24 ——【主】はこう言われる——知恵ある者は自分の知恵を誇るな。力ある者は自分の力を誇るな。富ある者は自分の富を誇るな。24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは【主】であり、地に恵みと公正と正義を行う者であるからだ。まことに、わたしはこれらのことを喜ぶ。——【主】のことば。』」神を知っていること、この方を人格的に知っていること、これを誇りなさいということです。